

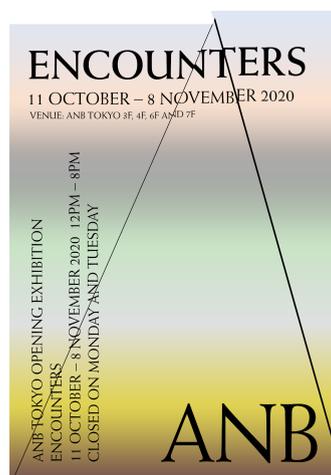
関係者各位

続報！ ANB Tokyoオープニング展「ENCOUNTERS」（2020年10月11日～11月8日）

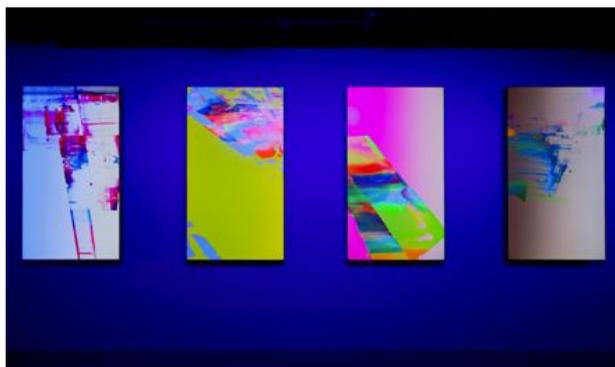
一般財団法人東京アートアクセラレーション（Tokyo Art Acceleration [TAA]）は、六本木にアートコンプレックスビル、ANB Tokyoをオープンします。10月11日（日）よりオープニング展「ENCOUNTERS」を開催。本展は、予期せぬ「遭遇」から生まれる新しい創造をテーマに、若手キュレーターたちが中心となって企画する4つの展覧会から構成されます。都市、ストリート、エコロジー、パーティーといった異なるテーマのもと、26組のアーティストが集結。遭遇と対話から生まれるセレンディピティを、ここANB Tokyoで体感していただけるよう願っております。

展示概要

- タイトル** ENCOUNTERS
会場 ANB Tokyo 3F, 4F, 6F, 7F
 （港区六本木5丁目2-4）
 ※六本木駅から徒歩3分
会期 2020年10月11日（日）～11月8日（日）
開催時間 12:00～20:00（入場は19:30まで）
休館日 月・火
チケット 一般：1000円
 中・高・大学生：入場無料
 ※受付にて学生証要提示
入場方法 Peatix（事前予約制）
入場規制 10名／毎30分程度
主催 TAA

**NEW!! ANB Tokyo の4つのフロアを縦断する本展の見どころのご紹介****3F NIGHTLIFE**

都市とは、最高の出会いの場であり、変化しつづける場である。都市は、統治と自立のせめぎあいのなかで発展し、「夜の街」にはそれが顕著に現れている。ここ六本木は、東京を象徴する盛り場であり、夜の空間から新しい出会いと文化を創出してきた。このフロアでは、ストリートやクラブカルチャーを出自とするHouxo QueとMESが、パーティーに見立てた展示空間を構成する。祭壇を想起するDJブース、かつて六本木のディスコで起きた死亡事故をモチーフとしたオブジェ、人工的に光る無数のディスプレイ作品など、都市の夜の営みに着想した記憶の痕跡と、これからの出会いや変化の始点を提示する。



Houxo Que 参考作品 - 《16,777,216 view #3, 4, 5 and 6 (from left)》2016



MES 参考作品 - 《HOTBED/温床》2019

3F 参加アーティスト：Houxo Que、MES

4F 楕円の作り方

正円は一つを中心から描けるが、楕円には二つの中心が必要である——楕円には正円のフォルムにない歪さと個性がある。そこに着目したこのフロアは、「ストリート」と「家族」の二つの中心をおいて企画された。まず最初に迎えるのは、90年代から、家族と自分をテーマに写真を撮り続けてきた長島有里枝によるポートレート。また、機械にグラフィティを描かせる作品で知られるやんツと、グラフィティアーティストNAZEがライブドローイングの共同制作を行う。ほかにも、スク립カリウ落合安奈、マーサ・ナカムラ、松田将英らが参加。家族から離れて路上へ飛び出し、路上から家族を想う、楕円としての展覧会。



長島有里枝 『SELF-PORTRAITS』より



やんツ 《落書きのための装置》2011

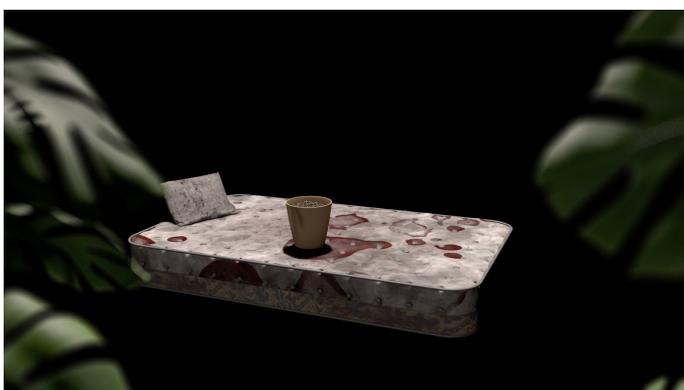
4F 参加アーティスト：スク립カリウ落合安奈、長島有里枝、NAZE、マーサ・ナカムラ、松田将英、やんツ

6F And yet we continue to breathe.

ビルの隙間や空き地に群生する植物を見やると、都市に生きる群集の一人ひとりもまた、見落とされがちな存在であることを思う。展示では、コンクリートや梁がむき出しとなっている6Fに、六本木で自生する植生を持ち込むことで、都市の表皮を反転させ、都市に群生する人間を重ね合わせる。植物と人間の境界線を独自の視点で描く片山高志、郷治竜之介、林千歩の平面作品。同様にその境目についてミクロな視点から描く山形一生の映像作品。そして、一瞬のまばたきを永遠に留めるような喜多村みかの写真で構成される。複数の視点の共存と、その収束しない景色について考える。



片山高志 《somewhere other than here》2016



山形一生 (タイトル未定) 2020

6F 参加アーティスト：石毛健太、片山高志、喜多村みか、郷治竜之介、丹原健翔、林千歩、山形一生

7F SOURCE/ADIT: Studio TOKYO PHOTOGRAPHIC RESEARCH

写真の機能や概念を拡張させながら、2020年代を迎えた「東京」を多面的に再解釈していくプロジェクト「TOKYO PHOTOGRAPHIC RESEARCH (TPR)」 。この活動の源泉 (=SOURCE) となるのは、写真家、現代美術家、建築家、メディアアーティスト、音楽家など、多様な表現者たちの視点である。このフロアでは、メンバーそれぞれの考え方や方法論が色濃く現れている作品を展示し、そこから見えてくる多様なヴィジョンとそのリフレクションを新たな時代の入り口 (=ADIT) として、アーティストが共働しながら模索していく「場」を立ち上げる。



小林健太 《Purple Lights #smudge》 2019



田村友一郎 《六本木心中》 2015
Courtesy of Yuka Tsuruno Gallery

7F 参加アーティスト：願剣亨、小林健太、小山泰介、谷口暁彦、田村友一郎、築山礁太、永田康祐、細倉真弓、三野新、吉田志穂、渡邊庸平

NEW!! 各フロアのキュレーターのご紹介

| | |
|---|---|
| 3F 西田編集長 Art Project Director / TAV GALLERY Manager | |
|  | <p>1986年生まれ。富山県出身。活動テーマは、芸術と社会を紐づける人に、「アナキズム・都市・人権」という実践を。主なプロジェクトに、「TAV GALLERY」(2014-)、「トモ都市美術館」(2020-)。主な企画に、「遊園地都市の進化」(RELABEL Shinsen, 2020)、「ノンヒューマン・コントロール」(TAV GALLERY, 2020) など。 http://tavgallery.com/nishida/</p> |
| 4F 吉田山 yoshidayamar 散歩詩人 / FL田SH Director 布施琳太郎 アーティスト | |
|  <p>©shin hamada</p> | <p>富山生まれアルプス育ち。都市が持つ複雑なストラクチャーを内面化し、表現へと結びつける。2018年に「同路上性」をテーマに掲げるギャラリー&ショップFL田SHを立ち上げる。また、パフォーマンスコレクティブのKCN (kitchen) のメンバーとしても活動。近年の主な活動に、アートフェア「DELTA Executive Committee」(FL田SHとして出展、2020)、「芸術競技」企画 (FL田SH, 2020)、アートプロジェクト「インストールメンツ」企画 (投函形式の展示, 2020)、アートフェア「EASTEAST_Tokyo」(FL田SHとして出展、2020)、「RISO IS IT」(渋谷PARCO OIL by 美術手帖, 2020)、KCN企画「台所革命 January revolution」(Gallery X, 2020) など。</p> |
|  | <p>1994年生まれ。2017年東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業。現在は同大学大学院映像研究科後期博士課程映像メディア学に在籍。洞窟壁画をはじめとした先史美術の研究と、iPhone発売以降の社会の分析に基づいて、絵画やインスタレーションなどの作品制作、展覧会の企画、運営、キュレーション、そしてテキストの執筆を行っている。主な展覧会企画に「iphone mural (iPhoneの洞窟壁画)」(BLOCK HOUSE, 2016)、「新しい孤独」(コ本や, 2017)、「ソラリスの酒場」(the Cave/Bar333, 2018)、「The Walking Eye」(横浜赤レンガ倉庫, 2019)、「余白/Marginalia」(SNOW Contemporary, 2020)、「隔離式濃厚接触室」(ウェブページ, 2020)、「化石観測」(三越コンテンポラリーアートギャラリー, 2020) など。</p> |

6F 石毛健太 アーティスト/インディペンデントキュレーター
丹原健翔 アーティスト/キュレーター・アマトリウム株式会社代表・アートスペース「新大久保UGO」メンバー



1994年生まれ。2016年多摩美術大学卒業後、2018年東京藝術大学大学院修了。Urban Research Group (URG) 運営。主な参加展覧会に、「生きられた庭」(京都府立植物園、2019)、「Reborn-Art Festival 2019」(宮城、2019)、「東京計画2019 vol.3 Urban Research Group NEW ADDRESS」(gallery αM、2019)、「working/editing 制作と編集」(キュレーターとしても加、アキバタマビ21、2020)。主なキュレーションに、「変容する周辺 近郊、団地」(品川八潮、2018)、高橋臨太郎個展「スケールヒア」(BLOCK HOUSE、2019)など。



1992年東京生まれ。米国ハーバード大学美術史学科卒業。主な参加展覧会に、「未来と芸術」(森美術館、2020)、「Ars Electronica」(リンツ/オーストリア、2019)、「過剰な包装」(東京、2019)、「Nature」(Cooper Hewitt、ニューヨーク、2019)。主な企画に、森山大道展(東京、2019)、「Welcome to Birdhead world, again. 2019 Tokyo」(kudan house、2019)など。

7F TOKYO PHOTOGRAPHIC RESEARCH

TOKYO PHOTOGRAPHIC RESEARCH

2020年代を迎えた「東京」を舞台に、最先端の写真/映像表現を通じてまだ見ぬ都市と社会と人々の姿を探求し、ここから見出されたビジョンを未来へ受け継ぐことを目的としたアートプロジェクト。写真家の小山泰介とキュレーターの山峰潤也を中心に、アーティスト、デザイナー、プロデューサー、編集者など20名超の有機的なコレクティブネスによって、都市と表現をテーマとした活動を多様に展開している。これまでウェブサイト上で9作家の新作を発表したほか、有楽町の工事仮囲い壁を舞台に作品を制作・発表した「YURAKUCHO ART SHIGHT PROJECT」(2020)、銀座の5つの商業施設で発表した「GINZA ROOFTOP PROJECT」(2020)、スイスの美術大学ECALと共同開催したスクール・トリップ・プロジェクト「ECAL x TOKYO PHOTOGRAPHIC RESEARCH」(2019)などを実施。主な展示に、「2020061620200726」(六本木鳥屋書店、2020)、「UNSEEN Amsterdam's CO-OP」(アムステルダム、2018)がある。

NEW!! チケットページ

- 10/11 (日) ~ 10/18 (日) 入場分チケット : <https://encounters1011-1018.peatix.com>
 10/21 (水) ~ 10/25 (日) 入場分チケット : <https://encounters1021-1025.peatix.com>
 10/28 (水) ~ 11/1 (日) 入場分チケット : <https://encounters1028-1101.peatix.com>
 11/4 (水) ~ 11/8 (日) 入場分チケット : <https://encounters1104-1108.peatix.com>

ANB Tokyoとは

2020年、六本木に誕生したANB Tokyoは、コミュニティラウンジやギャラリー、スタジオを有する新しいアートコンプレックスビルです。名前の由来は、既存の概念とは異なる何かを示す“Alternative”と、多様なものを受け入れる“Box”からきています。さらにはこの箱の中に、無数の物語“Narrative”が詰まっていくことを期待してスタートしました。世代やジャンルを超えたコミュニケーションから独自のネットワークを構築し、そこから生み出される可能性を開拓しながら、ANB Tokyoはアートと社会の新しい接続点となることを目指していきます。

TAAとは

アートを紹介して文化が息づくエコシステムを社会に醸成していくことを目指して設立された一般財団法人東京アートアクセラレーション(TAA)は、ANB Tokyoのほか、企業や行政と連携し、アーティストの表現活動、発表の場のチャンネル拡張を目指します。また自宅やオフィスにアートがある豊かな日常を目指し、プライベートな空間や時間におけるアートの在り方も提案していきます。



名称 : 一般財団法人東京アートアクセラレーション
 設立日 : 令和元年11月26日
 所在地 : 東京都港区六本木5-2-4 ANB Tokyo
 代表理事 : 香田哲朗
 共同代表 : 山峰潤也

問い合わせ

- メール : admin@taa-fdn.org
 ホームページ : <https://taa-fdn.org/>
 Facebook : <https://www.facebook.com/taa.fdn>
 Instagram : https://www.instagram.com/anb_tokyo/